

近江の友に：文苑

著者	江口，渙
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 5
ページ	8 7 - 8 8
発行年	1912-05-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/6316

私の噂

静

わが噂水の如くもひろがりてせまき白杵に置きどころなし
からくそそら笑ひせしその息に葬られたる可笑しき噂
別れきて浪に漂ひ大わだにふりすてられし心地こそすれ
自からのむくろの中に自からを呪へる虫のすみで食みける
うつろなる胸の中より紅の血の溢れたる夜のさびしみ(以下二首病床にて)
性にふすあらゆるものうとましくなりぬ悶て血を吐きしあと
人の世の終り至れる如くにもつくぐ見たる血潮のみだれ
横文字の僅計りをなまじひに知りて書きたる手紙のにくさ
忘れしわが身ながらも尙人を偲ばるゝかな春の夜の雨

近江の友に

みづのふる里

石田治部生みし近江はうれしかり今法樂を君に授くる
法樂の君がやすきをうらやみぬ秋立つ寺に蛸も釣る時

月出でぬ君法樂を語る時われ「夕霧」の戀を説く時
鴉の海淺黃の靄に月出でぬ舳に立つ君に秋の風して
蘆が鳴る彦根はゆかし古き世の古き姿の貴きを守る
小鼓の乙女と蘆の黄昏と月の淺黃にわれ泣きし夕
小鼓の枕も寒し水靄は青簾を滲みて藍に流るゝ
「享樂」は若き命の故里が幾度捨てゝ又歸り來る
中庸の安さに生さん吾ならばむしろ眞紅の渦に死なまし
學寮は悲しき山寨の若き芽は皆石に枯れ行く

情緒の饗宴

鼓

大和座のうす暗かりに能舞臺都みぬまに音づれこしよ
君ならでわき人も好し舞ふ御手を重々しけにひきぞわすらふ
「丁度丁度」酒なみくどつぐ扇塗柄をもるゝ眼欺むかす
藝人なれど薫はゆかし海土くればさびたる聲に大臣なかくする
七度ゆいて七度かへれとなほ疑がはず日本一の藝術にせむ
狂言をみればかなしも冠者ども去る影はやし流るゝがごと